

## 長崎市原子爆弾投下

片桐 恵司

私は昭和20年7月7日、七夕さんの日に大阪中部第22部隊に入隊し、陸軍の一兵卒として外地へ派兵される予定の兵隊でした。

国鉄柏原駅からノンストップで長崎に到着し、初めて日本の南の国に来て“良い港だなあ”と思いました。ところが、大阪から来た兵隊の駐屯する場所は市内には有りませんでした。私たちの軍隊は輸送船があれば直ちに乗船して、支那(中国)か、南方方面へ送られる予定だったのですが、私達を運ぶ船も、もうなかったのです。



駐屯地として約20kmほど離れた海近くの小学校と決まりました。一つの分隊には12人いたと思います。朝起きると6人は米つき、残りの6人は体力づくりと決められ、水泳・体操・ランニング・竹槍が日課でした。

8月9日、ちょうどその日は水泳のほうに当たり戦友とたわいないことを喋りながら泳いでいました。10時30分頃B29が2機、南の方からやって来ました。夏の日差しを受けて、時々キラッキラッと光りながら頭の上を長崎市内へ向かって飛んでいきます。私たちは海の中で戦友と「えらい高いとこ飛んで行きよったな、もう心配ない、大丈夫や。」等と言いながら市内の方を見ていました。

B29から何か落としたように見えました。快晴でしたので見通しはよくききました。パラシュートらしいのが二つ、「おい、あれ何か落としよったで？燃料タンクの予備、空っぽになったんでほかしよったんやろ」。そんなやり取りをして暫くするとB29の姿が見えなくなりました。その時(午前11時2分)、“ピカッ！”と鋭い光線と爆発音“ドカーン”あの恐ろしい原爆の炸裂です。20km程も離れていたと思う、私達の体には大きな音とともに、強烈な熱風と閃光が浴びせかかりました。「ウワァ…、えらいこっちゃ、どないなつたんや…」、顔色もなくなり体はガクガク震え「あかん、もういっぺん海へ潜れ…」誰かが呼ぶ、耳を押さえて潜りました。ところが海の様子が少しおかしい？そおと首を上げると、辺りは一面真っ赤になっており、次第に真っ黒に変わりつつ雨雲が垂れ下がったような、どんよりとした状態に変化しました。嵐の前の静けさ、と何

だか不気味な気配が漂っていました。みんな恐怖感で一杯でした。

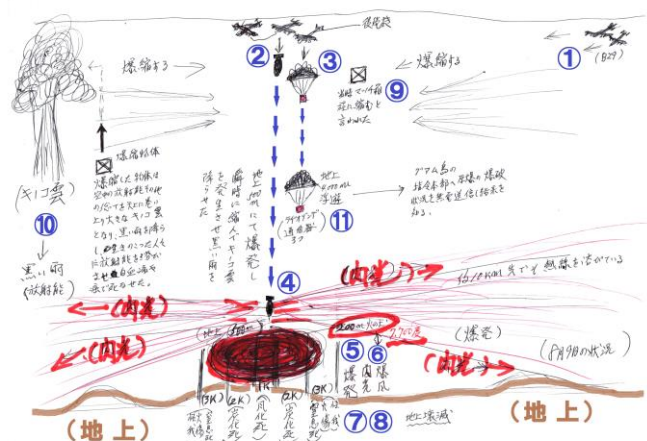
何とか夕食を食べ終わった頃、市内から伝令の兵が来ました。「今日昼の爆弾で長崎市内が全滅しました。すぐ救助に出動して下さい。」とのこと。みんな一斉に「へえーたった一発の爆弾で全滅やて、ホンマかいな、えらいこっちゃなあー」と言いながら装備を整え、出発となりました。目を擦りながらの夜通しの行軍になりました。

夜中から明け方近くなって、辺りが見え始めると、だんだん街の様子が見えて来ました。傾いた家から半壊・全壊、まだ焼けている家、焼け落ちた家と、被害が徐々に大きくなって、一步市内へ入った途端にみんなの声が一斉に「ア、ア、ア…」驚きに変わりました。「ウワァ…えらいことになってしもてるなあー、こんなやと思えへんかった。」あまりにも想像以上でした。はるか彼方まで見通しがきき、建物は何もなく、コンクリート建ての残骸だけ残っています。一方ではガス会社のコークスの山がポツ、ポツ、ポツと燃え放題。熱い熱いの地獄模様そのままの状況でした。

海近くに立ち並ぶ三菱製鋼所は、全壊で鉄骨だけがへし曲がって残り押し潰された建物からはまだ煙が立ち昇っています。

何から手を付けたらよいのやら迷っていると、小隊長から「先ず死者を探せ」との命令が出、工場内で亡くなられた人を見つけるのが第一の作業になりました。あちらこちらと捜し、地下壕に事務所があり、事務の方3名を発見しました。男性1人女性2人、折り重なるように亡くなられていました。3人とも圧死です。何とも言葉では言い表せませんでした。血液の循環が止まり腫上がり、男性も女性も倍ほどの体型になっています。合掌してその方々のご遺体を担架に乗せ、本部となっている玄関へ運び心配して家族を探しに来ている身内の方に見て確認してもらい“荼毘”に付し、遺骨を木箱に入れてお渡しする作業になりました。

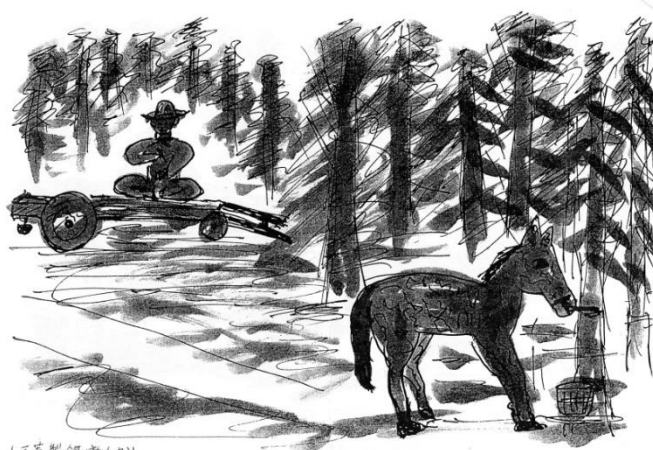
二日目からも色々な怪我をした人、火傷を負った人達の運搬や、死者の片付け等自分で何をしているのか分からなくなり、ただただロボットのように体が動いているだけでした。炎天下、喉が渴いても何の爆弾やら正体が分からないため、噴出している水道水を口にすることも出来ない始末。海兵隊の地下倉庫に保管してあったビールが熱気でポン…ポンと爆ぜ、ホットビールになって噴出している。喉はからから、体は



原爆投下の図

汗と埃でじりじり。それでも命令は飛んで来ます。「次は向こう」指差す方へ駆け足です。

ある場所で工場へ資材を運んできた荷馬車でしょうね。その当時の運送は殆ど荷馬車でした。トラックのガソリンは全て軍の物でした。荷物を降ろして馬を木陰につないで、馬子さんがお昼の弁当を食べていた時に被爆されたので



（三菱製鋼(中地区)）  
昼食中に一瞬で黒焦げになった人

すね。荷台の上で胡坐をかき弁当を片手に、一方の手で箸を持ったままの姿で黒焦げになって死亡。馬は木陰だったので閃光にやられ、全身大火傷。馬体は総ケロイド状態で血が滲んで、目だけパチパチさせている。そんな可哀想な姿を見ても、もう涙も出なくなり、啞然と見ているだけでどうにも触ることが出来ませんでした。

もう一つ、目に残っている状況は、市電チンチン電車の焼け跡の中でした。空襲警報が出たので我先に逃げようとしたのでしょね。窓から片足を外に出し、両手で窓枠を持ったままの姿で、真っ黒の焦げの死体。手を外そうと触ったとたん、焼けた指がポトンと落ちる。このような作業の兵隊。運命とは言いながら今でも目を閉じれば、これらのことが次々と浮かんで来る。

炎天下の作業に入って3日目、小型の敵機が飛来し低空飛行をしながらビラをまいて去っていきました。日本車の降伏を促すビラでした。その内容は「9日、B29より投下した爆弾は、化学爆弾でこの一発の威力はB29二千機に爆弾を満載し、一箇所と同時に投下しただけの破壊力が有る。日本の兵隊さん諸君は直ちに武器を捨てて降伏しなさい。」正確ではないが2度ほど読み返している内に、上官に取り上げられ「一切口外してはいけない。厳罰に処す。」とのきつい命令でした。

終戦から70年、国民の総力に依って平和を保ち、みごとに発展して来た日本。今の豊かな国、日本。この大切な自分の国を、憲法第九条に明記し定められている法律を守り、二度と戦争をしないことを一人ひとりが平和の合言葉として、

『戦争反対ではなく、してはいけない。

すれば、あなたが死にます。』